

7月フォローアップ研修を実施

7月17日（金） 29名参加 於・歴史に憩う橿原市博物館・シルクの杜



歴史サークルが企画したフォローアップ研修は、歴史に憩う橿原市博物館の協力で、考古学講演会▼古代瓦拓本体験▼博物館観覧の3部構成で実施されました。

講演会は田原清澄氏（27期）の司会で進められ、初めに松井一晃館長から「世界文化遺産になれば

ボランティアの皆様の役割はますます大切になります。私たちと一緒に歴史を楽しみましょう」との歓迎の挨拶がありました。続いて、稲葉登静子氏（3期）の講師紹介を受け、橿原市文化財保存活用課副統括の竹田正則氏（元館長）が「菖蒲池古墳と周辺の古墳」と題して講演しました。



講演する竹田氏

竹田氏は、菖蒲池古墳の横穴式石室や、南北に二基並んで安置されている家形石棺、円墳かそれとも方墳か？と論争になった墳丘の構造について、明治時代から活躍した考古学者の野淵龍潜氏、上田三平氏の発掘調査報告書や、『奈良県高市郡志料』などの史料とイラストを照らし合わせて解説しました。竹田氏は「方墳である」とするとともに、石棺（前棺）に残された「矢穴」の特徴をタイプ別に分析し、「矢



松井館長から拓本製作の説明を聞く参加者

穴の形状から 1893 年以降 1915 年以前に棺蓋の前方は割り取られたと考えられる」と指摘しました。

また、近接する小山田古墳、五条野宮ヶ原 1・2 号墳について、石室の規模や墳丘の特徴、それぞれの築造立地の違いや共通点などを見取り図をもとに説明しました。

最後に、被葬者について、多くの歴史学者、考古学者から出されている説を紹介しました。有力とされる、菖蒲池古墳の「蘇我入鹿小陵説」「蘇我倉山田石川麻呂と長男の興志（こごし）説」▼小山田古墳の「舒明天皇の初葬墓説」▼五条野宮ヶ原 1・2 号墳の「蘇我蝦夷、入鹿の大陵・小陵」説の検証を行いました。竹田氏は、「菖蒲池古墳は蘇我倉山田石川麻呂と長男 興志と考えるのが妥当である」と締めくくりました。

このあと参加者は、グループごとに古代瓦拓本体験と、博物館の観覧を行いました。

同館が企画・提供する「カラー瓦拓本」は



カラー拓本に挑戦する参加者



出土した金製の装飾品に見入る参加者 ム（※）です。古墳群は、畝傍山の南方に広がる東西 2km、南北約 2 km の丘陵に径約 10 ～ 15 m の円墳など 600 基以上の墳墓が確認されています。1962 ～ 1966（昭和 37 ～ 41）年にかけて、120 基ほどの古墳を発掘調査しています。その後の調査数を含めて、130 基の古墳が調査済みとなっています。その中に古墳時代前期とみられる副葬品で、珍しい「懸垂鏡（けんすいきょう）」が含まれていました。また、武具・馬具などの副葬品が豊富に出土しました。5 世紀後半の 126 号墳からは金・銀・ガラス・ヒスイ製の装飾品が遺骨に装着したままの状態出土。また火熨斗（ひのし＝炭を入れてアイロンとして使用した金属器）が日本で初めて出土したり、ローマンガラス製品がみつけられました。

126 号墳の、長方形墳（東西約 22 m × 南北約 16 m、高さ約 3.1 m）の木棺を用いた埋葬施設からは、ペルシャ地方や中国東北部、朝鮮半島などから運ばれてきた副葬品（重要文化財に指定）が数多く出土しています。参加者はそのきらびやかな金製品などに目を奪われていました。

＜※＞サイトミュージアム：遺跡や歴史的建造物など「モノが見つかった現地そのもの」を展示空間として整備し、解説施設や遊歩道などを備えた博物館形態。発掘現場や史跡を保存・公開しながら学習・観光の場とする点が特徴である。

（文と写真：27 期佐藤、写真提供：16 期佐々木）

本来、墨を使用する拓本を絵の具を使うユニークな手法（湿拓）で、藤原京の大官大寺跡から出土した軒丸瓦の複弁蓮華文の瓦当と鬼瓦の模様を、紙を当てて写し取るものです。松井館長によるポイント講習の後、同館の職員の助言を受けながら、参加者は拓本にチャレンジしました。

同館では、市民対象の拓本体験を毎週土・日・祝日に実施しており、事前に電話予約（0744-27-9681）を受けて、サービスを提供しています。体験料（材料費）400 円です。

博物館観覧は、歴史サークル員 古川隆一氏（17 期）、水野日出夫氏（25 期）2 名のガイドによって実施されました。

歴史に憩う橿原市博物館（愛称：いこはく）は、「新沢千塚古墳群」に隣接したサイトミュージアム（※）です。古墳群は、



金製の装飾品



「シルクの杜」で集合記念撮影

